
勇者が男だけだと思っていた時期もありました

RURU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者が男だけだと思っていた時期もありました

【Nコード】

N9061V

【作者名】

RURU

【あらすじ】

平凡な生活を送っていた俺に転機が―偶然に偶然が重なり……いや必然だったのかもしれない、目の前で目も開けられない程の光がリビングを包んだ後、俺の家の食卓に勇者が並べられていた。そう、綺麗で強い彼女が……今日から家族が増えました！偶然から巻き起こる美少女勇者との同棲生活が始まった！一応ラブコメ、ネタなど多く含みます。

プロローグ

とある魔法と剣の世界。

二つの種族が争う世界。

一つは人間。 剣と知恵で戦う者

一つは魔人。 魔法と力で戦う者

この二つの種族は領土を取り合い戦争を繰り返していた。

そんな世界のある荒野、一人の女性が剣を持ち、向かってくる魔人達を切断していく。

攻撃を避ければ首を刎ね、魔法がくれば体を捻りかわしていく。それはまさに踊っているように華麗でいて無駄の無い戦い方だった。

彼女が単身で戦っているのは彼女が勇者という―魔人専門の殺し屋―職業に就いているからである。この世界で力ある者が勇者になる事は一般的だが彼女みたいに女でしかも勇者の中でも上位に入るような強さを持つものは男の同業者に酷く疎まれた。

そして、その醜い男達は敵である魔人と強力しこの世界から追い出す《転移》の強化版を作り出し隙を窺っていた。今がその時である。

彼女が最後の一人を倒した瞬間その魔法陣が発動した。

こうして彼女はこの世界から弾き出された。

「成功だ」

「これで勇者は男がふさわしいと皆も気がつくだろう」

彼らは彼女の活躍に比例し「女性勇者も有り」と、言うことで、それほど強くなかった彼らの仕事が少なくなっていき、落ちぶれていったのだった。仕事をせずに《転移》魔法の改造に没頭するほどに人間は補助魔法なら魔人にひけをとらないのだ。

イエーイ

と、お互いハイタッチを交わした。

そして魔人ともハイタッチを交わす。

イエーイ グシャ

魔人が腕に魔法を掛け強化していたことも知らずに……

一話・勇者がやってきた

ゴールデンウィーク四日目の夜、俺、南野流兎はチャンネル棒を片手に、夕飯が並び始めているテーブルの前で面白い番組がやってないか物色していた。

「リュウちゃん晩御飯にしましょう」

そう言つて母さんはご飯を俺と自分の定位置に置いて俺の向かい側に座った。

俺も諦めてチャンネル棒を置いた。

その瞬間、“頂きます”をする前にテーブルが光り出した。

「何だっ!？」

目を開けられない程に光り輝いていたテーブルの光りが弱まっていた。俺が目を開くとそこには、ご飯に味噌汁におかずの焼き魚、コップに入った水、そして……

綺麗な金色の髪を腰まで伸ばし、RPGでありそうな防具?をつけていた美少女が横たわっていた。

「母さん流石に人は食べれないよ?」

「私は出してませんっ!」

ですよね〜

「ん、ここは……？」

「南野家ですけど？」

「……………」

返答に失敗したようだ。返事が無いただの屍のようだ…なんちゃって彼女はテーブルから降りて自分がいた場所を見つめる。

「成る程、偶然この食卓が魔法陣の役割をしたのか……」

ぶつぶつ何か言っている。

マホウジン？ what？ チョットお兄さん分かんない

「始めまして、私はマルチ・ラグナと申します。今から私がここに召喚された経緯をお話致します。どうか、最後まで聞いてください」

マルチさんは頭を下げた。その動作は真剣で魔法陣とか信じられないけど、話ぐらい聞いてみようと思えた。

マルチさん曰く

- 1、こことは違う世界で勇者をやっていた事。
- 2、誰かに《転移》魔法でその世界から追い出された事。
- 3、このテーブルの上に偶々《召喚》魔法が発動した事。
- 4、召喚された者は召喚者の命令を一つ聞かなければならない事。

以上。本当に信じられないけど、マルチさんが嘘言ってる様には見えないし、何より本当に出てきちゃったしな！。

「よし、僕と契約して魔法少女になってyぐふあっ」

母さんによる焼き魚の投擲。俺にクリーンヒット

「あなた、元の世界の家族の元に帰りたいかしら？」

母さんは穏かな口調でマルチさんに尋ねた。

彼女は少し考えた後口を開いた。

「いえ、物心ついた時には家族は全員無くなってましたので……それに、勇者をやっていたのも生きるための金稼ぎでしたので別に帰りたいとは……」

「そう、じゃあ私からの命令。いやお願いかしらね、私たちの家族になってくれないかしら？」

いい話だ。うん、実にいい話。

でも聞いてお母様、ここに思春期真っ只中のこの僕が居るのよ!?

「……奥方」

「私は南野里奈よ。そして、こっちの煩いのが流兎。よろしくね」

「此方こそよろしくお願いします。里奈さん、流兎」

ここに来て初めて笑った。

そんな顔見せられたらどうでも良くなって……ないがな

ちゃんと話を聞いてよう

二話・ドツキ同期

マルチーさんは付けなくていいと言われた、同い年だったからだー
が来て寝床が小さくなった。

母の仕業である。自分のベットで寝かせればいいものの「ここは隆
介さんと私のーだから駄目」と言い張りやがる、歳を考える歳を、
マルチはソファで寝るとか言うし、お客様用の敷き布団にはカビ生
えてるしで仕方なく俺のベットに寝ることになった。

だがしかし、抜かりは無い！

ダンボールッ

ガムテープッ

びーペタペタ、びーペタペタ……

完成！しきり壁（某青狸風）

これを使う事で同じベットで異性と寝ても間違いは起こらない……
はず。

負けるな俺の理性！

――翌日

乗り切った。偉いよ俺の理性、よくがんばった……なんてね、ア
ニソン流してたら割と平気だった。え？マルチの寝顔こっそり見た
りシテナイヨ、ホントダヨ

と、よく分からない人格が出てきた朝のこと、マルチには母さんの所に行って貰った。大体母さんと背が一緒だから母さんの服が着れるだろう。

俺も着替え一階のリビングへ降りた。

「……………如何だろうか？」

そこには、母さんの服を着たマルチが居て、俺に声を掛けてくれた。白を基調としたワンピース、ただそれだけで昨日のマルチとは雰囲気の違い、優しい感じがした。

「うん、とても似合ってる。可愛いよ凄く。母さんがこんな服持ってたなんて信じられな痛いっ、痛いでございますお母様、私めの腕の関節はそちらの方には曲がらない設計でしてギブギブギブッ……ヘルプ、ヘルプミー、マルチた、助けて」

「可愛い？私が……………」

と呟いて顔を真っ赤にしている。
お願い……………タスケテヨ

ギリギリギリ

どんどん強くなっていく母さんの関節技。

「私にも、私にも若い時代が、ううん、まだ若いわ、だってご近所の奥様たちに「南野さんって一歳に見えないわ」って言われるもの。そうよまだ若い、まだ……………」

「腕がもげるっーのーっ！！」

俺の悲惨な叫びが轟いた。

* * *

ようやく開放された俺は今後右腕を大切に扱ってやろうと思った。話は変わるが、マルチが魔法でこの世界の知識を得るらしく、俺に手伝ってほしいらしい。

「俺、魔法なんて使えないぞ？」

「大丈夫です。知識を共有する魔法ですので、流兎の知識を教えて貰うだけです」

成る程、それならいいか。

「では、始めます。流兎私の前に……」

「はいよ」

マルチの前に座った。今から魔法使うつてなるとワクワクする。

「私の国の魔法はこの世界で言うでーたというのに近いです。一回その魔法陣を創る、もしくは学んで脳に保存すれば、魔法名を言うだけで使用できます。人によって保存できる数が違いますけどね……強力な魔法を保存するとそれだけでいっぱいになる場合もあります」

「それでは《同期》」

俺とマルチの周りに魔法陣が形成される。

その後、マルチは俺の額に自分の額をくっ付けた。

「こうしなきゃ出来ないんです。我慢してくださいね」

我慢だなんて、むしろ大歓迎です。

しかし、相手は美少女、俺の顔が即効で赤くなるのが分かる。

マルチも負けないぐらい顔が真っ赤だった。

五分位経ち、マルチは額を離した。

一部の知識を受け取ったから割と早く終わっただけらしい。

「む、これは……」

「どうした？」

「……ーキが……食べてみたい」

「もう一回言ってくれ、聞こえなかった」

マルチが蚊の鳴く様な小さな声で何か言ったのでよく聞こえなかった。

「ケーキが食べてみたい！」

女の子だなーと思いました……

「お母さんの分もお願い♪」

――金頂戴

「お小遣いあげてるでしょう」

「はあ、財布取って来るからマルチは玄関で待っててくれ」

「分かった！」

ん？何時もなら「了解した」とか言いそうだけど……あ、財布財布

マルチは普通の女の子の話し方の知識も流兔からこっそり貰っていた。

三話・ケーキ屋のエセ魔王

― 前回のあらすじ

腕がッ

マルチのおでこスベスベで気持ちい

ケーキを買いに行こう

――○――

財布を持った俺はマルチと一緒に母さんが教えてくれたケーキ屋に向かった。

途中でマルチが心配そうに聞いてきた。

「あの、良かったんですか？ 私なんかの為に……」

「良くなかったら来てないよ、それにもう家族なんだから遠慮するなって」

「流兔、ありがとう」

我ながらくさい台詞だった。でも、嘘偽りの無い気持ちだから恥ずかしさは無かった。

それ以降、マルチは俯いたままで話はしなかったけど嫌な雰囲気ではなかった。

数分後、ケーキ屋に着いた。

「……嘘だろ」

その名は——翠。——

喫茶店でない所が唯一の救いだ、偶然かもしれない入ってみよう。

ガチャ

「いらっしやいませなの」

バタンッ

「よし、違う店に行こう」

「どうしてですか？」

「そうだよ。せっかく来たんだから入って入って！」

いつの間にか後ろに居た店員であろう茶髪のツインテールの彼女は、
そう言いながら店に俺達の手を引っ張っていった。

「マルチはケーキ選んで、俺はこいつに話がある」

「分かりました」

マルチはケーキが並べてあるショーウィンドウに向かった。

俺は「三つまでだからな！」とマルチに釘を打った後、彼女と話を始めた。

「何で。屋何だ？」

「お母さんがケーキ屋始めるって言って、私がアニメとか漫画とか好きで、ちよろつと口がすべっちゃったんだよねー、まさか本当になるなんて……」

「あはは、あんた名前は？」

「あらお客さん、ナンパですか？当店ではケーキ以外扱っておりませんので改めてお越しく下さい」

「分かった、もう来ない」

「嘘だよ、高町なのh」「一生来な……」 奈菜香だよ！—水嶋奈菜香！もう、「冗談じゃなかあ」

「悪い悪い、でもおかげで名前が聞けた。奈菜香……いい名前じゃん」

「うゝ、いつも君そんな感じなの？」

若干顔が赤くなってるのは気のせいだろう、それよりあっちが名乗ったんだからこっちも自己紹介しなきゃな。

「君はやめい、流兎だ、よろしくな」

「流兎！、決まりました！」

あんなに熱心だったケーキ選びも、もう終わっただらしい。

俺？俺はプリン一択

有難う御座いましたゝ

ケーキの袋片手にもと来た道を帰った。

四話・二重の美味しさ

トウツトウルー♪

お母さんです。

もうすぐ帰ってくるであろう子供たちのためにお茶を入れています。

「まあ、なんて気の利くお母さんなのでしょう♪」

ただいまー

「帰ってきたわね」

私はそう呟いてーお茶をお盆に載せ持ち上げてー玄関に向かった。

「お帰りなさい、私のも買ってきたわよね？うふふ……」

「買ってきたから！、その不気味な笑い声止めて！」

まったく、失礼しちゃうわ。

誰に似たのかしら？

「ふふ、お茶入れたから皆で食べましょう」

さてさて、マルチちゃんは、ショートケーキにチョコレートケーキにフルーッタルト、リュウちゃんは何時も通りプリン、残っているのは……モンブラン

好きなものだけれど、モンブランっておばちゃんってイメージがあるのは私だけかしら？

もちろん私は永遠に麗しのお姉さまなのですけど……

そんな事を俯いて考えていると、ケーキより甘い匂いが流れてくる。そして、部屋の雰囲気はピンク色に！

こ、これは！？

向かい側の席でマルチちゃんにリュウちゃんが、
“あ〜ん”をしている！

それも大好物のプリンを……

あ！今度はマルチちゃんがショートケーキをリュウちゃんに食べさせている！

なんて羨ましい事でしょう。

私にもあんな時代がありましたね〜

さて、もうすぐリュウちゃんの学校が始まっちゃいますね〜

後でマルチちゃんに聞いて行きたいようならあの学園長とOHANASHIしなければなりませんね〜

ケーキを食べた後、リュウちゃんに内緒で聞いてみたところ結論行きたいそうです。さて忙しくなりそうですね……

お金？家はかなりお金持ちなのです。

外国に居るお父さんに感謝ですね〜

* * *

——マルチside

待ち望んだケーキ。

流兎の横に座り、箱を開ける。すると、甘いケーキ屋さんで嗅いだ匂いと同じ匂いがリビングに広がった気がした。

流兎が買ってくれた三つのケーキ、里奈さんはモンブランを持ったまま俯いている、しかし、今の私は気にしていられなかった。なぜならケーキが目の前にあるから！

同梱されていたプラスチックのフォークでショートケーキを一口大に切って口に運ぶ。

衝撃が体中駆け巡った。

クリームの甘さ、スポンジの食感、苺の酸味……知識は有ったけど実際に食べてみると感動

を覚えた。この世にこんな美味しい物が有るのだと……

他の人にもこの美味しさを分かって欲しくて、フォークで刺して流兎の方に向いた。

「流兎！美味しすぎますよこれ！食べてみてください！」

流兎が何度も食べたことがある事を忘れて。

その行為がリア充カップル共がやっている“あゝん”だということも忘れて

勿論流兎は一回断ったが、あまりにもマルチの目が輝いていたものだから断りきれず顔をほのかに赤く染めて……

あ、あゝん

「如何ですか？美味しいですか？」

「（二重の意味で）美味しいよ」

「そうですか！」

その後、自分のプリンをあのキラキラ輝く黄金の瞳に負けて食べさせてあげた。

五話・漲る俺と親近感（前書き）

今回から長めの文を書けるようにがんばりたいです。
色々変えました、落ち着かない性格で申し訳ない

五話・漲る俺と親近感

勇者マルチが来て二日、色々あつて忘れてたけど明日学校だ……課題は後一つの半分までやってたが忘れるところだった。

「漫画と言う物を読ませて欲しいのですが……」

「その本棚から好きなもの取って行つていいよ……」

本当はお勧めの漫画を教えてあげたい所だがさつさと課題を終わらせねばならないので、終わるまでは構つてられない。

半分されど半分

終わりに近づけば近づくほど力が出ない俺はなかなか終わらせられないでいた。

原因はそれだけではない、マルチが持ち前の綺麗な声で漫画を音読していて集中できなかった。内容がもっともとだったら良かったんだけど……

「クリリンのことかーっ！っ！！！」

ぶっ

「マルチお願いだから静かにして」

「すみません、熱くなつてしまつて」

ようやく俺はまた課題に取り掛かった。

―三十分後

「あゝやつと終わった」

俺は疲れた体を伸びをしてほぐした。

課題が終わると無性に嬉しくなって遊びたくならないだろうか？俺はなる、一時期のテンションに身を任せ何でもやりたくなる。

「ではこれをやってみてください！」

心を読んだのか、はたまた課題が終わったから来たのか分からないが、わくわくと顔見れば分かるようなテンションでとある漫画本のページの中のコマを指差し見せてきた。

「どれどれ……」

まさかのかめはめ波！いやなんとなく分かってたけどね。

「いやこれは無理だろう」

「そんなに“気”が有るのにですか？」

はい？何て言いました？

「ですから、そんなに“気”が有るのにですか？と……」

「よく見てよ、何も出てないでしょ？」

「バリバリ出てます。他の人とは比べ物にならないぐらい出ていま

す。何ならこれをやってみてください、きっと出来る筈です」

嫌だ嫌だと断るがマルチは依然諦めないし、元勇者様が“気”があるって言ったらちよっとはやってみてもいいかなって思ったりしなかったり。

「はあ、分かったやる」

「ホントですか!？」

「その代わり出来なかったらマルチもやれよ」

「私には“気”は無いん「無くても!」……分かりました」

よし、まずマルチから少し離れる、その後精神を落ち着かせる。出来なかったときの虚しさ、出来たときの興奮それを思うと心臓の鼓動が早くなる。

行くぞっ!!

両手首を合わせて手を開いて、体の前方に構える「か」

腰付近に手を持っていきながら「め」

「は……め……」 気?を溜めながら（気張る）両手を完全に後ろに持っていく

開けてあった窓に向かって放つ!

「は――――――!!」

「……………」

「……ぷっ」

恥ずかしっ！

結果、空気を勢いよく振り切った俺の腕からは何も出なかった。それどころかマルチに笑われてしまったし、結果を分かっているにも羞恥心でいっぱいだった。

「次はマルチの番ね」

「いいですとも」

マルチも構える。

「……か」

「もっと大きな声で」

「め……は……め……」

「声でてないよ」

「はぁー」

「俺の気持ち分かったよね？」

マルチはやる前こそ意気込んだが、いざやるとなると小声で、顔も進んでいくことにどんどん赤くなっていった。

「はい、これはなんていうか刺さりますね……心に」

「分かればよろしい」

「あ、分かれば……で思い出しましたが、やっぱり流鬼は“気”が無いのでは無くて栓……みたいな物が“気”でしてあって、出てこないみたいなんです」

なんですと！？

「よろしければ私の魔法で取ってみますけど？」

マルチの取る方法とは一応治療魔法の一種で、魔法球を生成し体内などの手の届かない場所にある病原体なんかに送り病原体と同化した後、転移の応用で取り出したり、ガラス細工の加工に使用されたり……何時もは喉に刺さった魚の小骨の除去などに使っているらしい。

勿論俺の答えは……

「お願いします」

「了解しました」

さっきのかめはめ波をやったときから、俺もマルチもテンションが以上であつた。

「それでは……《救球》！」

魔法陣が展開され、黄色い魔力の球が俺の体へ向かってくる。心臓の前で止まった握りこぶし大それは、十秒後“栓”を吸収したのだろつ、大きさが五倍近くに膨れ上がった。

“栓”とやらが外れた俺は……

「みwなwぎwってwきwたw w w」

これが“氣”というやつなんだろう、色は薄い青色、つまり空色？
水色？的な色で、力があふれ出すってゆうか、眠ってた力が覚醒し
たってゆうか、感覚的に風呂から出たときのような清清しさ。

「うまくいったようですね……わくわく」

ナニカやらせるつもりであるな！この娘っ子！

「かめはめ波に〜念能力に〜私が考えたのもやって欲しいですね〜」

「よし、夜公園に行くぞ！夕方までは人が多いから！」

あ〜楽しくなってきた〜

「技の前に気のコントロールからだからな！」

「分かってますよ〜私も始めて魔法が使えたときは言葉で伝えられ
ないほど嬉しかったのをおぼえています」

なんかマルチに親近感が沸いてきた。

これからもうまくやっていけそうだ、と俺は喜びの傍らでそんなこ
とを思っていた

五話・漲る俺と親近感（後書き）

間違っている文法や誤字がありましたら
どうぞ指摘してやってください。

六話・勇気、欲しいよね（前書き）

どんどん流兎のキャラが分からなくなる。
これだからトーシローは駄目ですね。
楽しんでいただけたら幸いです。

六話・勇気、欲しいよね

朝起きて、床の固さを噛み締める。

マルチの胸の谷間が目の前に、なんてことは無く目の前に広がるのは埃被ったベットの下の。

お忘れかもしれないが、ダンボールウォールは役に立っていてマルチに指一本触れさせない。元々そこまで大きくないベット、壁際に設置されているのだが壁が無い方に寝ていた俺はとうとうベットから墜落してしまっただけらしい。

頭を埃の魔窟に突っ込んでいるあたり寝相の悪さを窺える。

取り敢えずベットの下から脱出。

「うおがつ！」

完全に頭を出し切れず後頭部をぶつけてしまったらしい。

まだ脳が覚醒してなかったみたいだから痛かったが目が覚めて丁度良かった。

今日から学校だからな、遅刻は出来れば避けたいものである。

ベットから這い出てベットを見るとマルチの姿は無く先に起きて下の階に行っただろうと確信する。

「さて、着替えますか」

昨日、柄にも無くテンションを上げてしまった所為かもんのすごくだるい。

まあ自分がどんな柄なんか自分じゃよく分からんけどね、おかげで皆によくキャラが迷走してるって言われる。

俺は無個性やつちゅーに……

なんやかんやで着替えが完了し、え？着替えの描写？そんな誰得な

サービスしませんで、紺のブレザーにグレーのズボンを着用し、フラフラと階段を降りた。

ガラッ

母さんの部屋の引き戸が開いた。

そこから出てきたのはなんと、うちの学校の制服を着たマルチだった。

紺のブレザーにプリーツスカート学校に行けば着ている女子生徒を見れることだろう。

しかし、マルチの腰まで長いその金色の綺麗な髪や瞳は漫画や小説の中でしか見なかったそれらは、そこら辺にいる女子には絶対に出せない魅力だった。

「似合ってるでしょうか……」

顔を赤らめ心配そうに聞いてくる。

はあ、自分が可愛いとか綺麗だと思わないんかこの娘は

「似合いすぎ、可愛すぎ、てか惚れてまうやろぉ」

ここで昨日のテレビで出た芸人のネタが出た俺マジナイス、似合いですと可愛すぎは本音だが、くう異世界人はレベルが違いすぎる！ハルヒも羨むに違いない。

「惚れてくれるんですか？」

なんて追い討ち！顔真っ赤＋上目遣い、涙目もついてたら確実に落ちていたに違いない。
だがあしかあし！！

「母さんの入れ知恵だつて事は分かつてる」

「あらら、ばれちゃったわね」

「当たり前だろ、母さんニッコリじゃなくてニヤリになってたし、マルチが俺なんか好きになるはず無いだろ！」

「……そんなこと……ない……ですけど」

「え？なんか言つた？」

「いいえ、何も言つてないですよ」

若干拗ねてるように感じたのは気のせいだろうか？

流兔が思つてるより乙女な思想をマルチが持つてる事を知るのは大分先のこと――

「それより何でうちの制服着てるのさ!？」

「答えは簡単ですよ？ヒントは学園長とOHANASHIしました」

心の中で学園長に合掌した。

母さんの怖さは父さんの次ぐくらいによく分かつてるつもりだ。
ブルブルッ背筋が……

「それじゃあ朝ご飯にしましょうか」

確かに朝ごはんの匂いが漂ってきて食欲を掻き立てる。

俺は味噌汁を啜りながら思った……

今日は騒がしくなりそうだと

* * *

俺が通う学校、斯道学園は家から徒歩二十分位で着く割と近い高校で校則も緩くとても過ごし易い学校だ。

生徒の自律や個性を大事にしている学校で髪型も特に注意されたことが無い。

頭の良い学校に行った中学の時の友達はとても羨ましがっていた。

何でも週に二回は頭髪と服装をチェックされるらしい。

他の学校もそんなにきついのかな？

取り敢えず、そんな学校だ。

「討伐依頼以外でこんなに早くから外出するのは久しぶりで何だか新鮮です」

そんな元勇者な女性―同年の美少女―と一緒に登校するのは何だか新鮮です。

彼女いない暦〃年齢の俺にこんな日が訪れようとは思ひもしなかった。

自分の見た目が悪いとは思ったこと無いが、自分の事をカッコイイ―と思えるナルシストでもないの、バレンティンチョコを貰った事は有るけど告白したりとかは一度も無かった。

そんな勇気何処かに落ちて無いかな―

「名前は勇気です拾ってください」

「違う勇気が落ちてるううう!!」

「どうかしましたか？」

「な、何でも無いほら早く行こう」

マルチをぐいぐい押して高校に向かった。

何だよあれ、猫みたいに捨てやがって、育てられないなら産むなよ！
電柱の影に置かれたダンボール箱の中に居た赤ちゃんの母親に憤怒した。

途中で気になって振り向くと勇氣君が無垢な視線を送っていた

止めて！そんな目で俺を見ないでくれ、後で児童ナンチャラ所に電話しておくから、ね

* * *

そんなこんなでやっと学校に着いた俺たちは職員室に向かった。
職員室の扉をガラガラっと開き担任のいる机に向かった。

「ようナノそいつが例の転校生か」

「はい、そうっす」

「ナノ？」

「ああ、みなみの南野の読み方を変えてナノって呼んでんだ。自己紹介よろ」

マルチの素朴な疑問を適当に答えて自己紹介を促進させる。
資料的なもの読んでないんだろうか？ま、そんな人だけどね。
ここで俺は先に教室に戻った。

「南野^{マルチ}円知です、流鬼のいところです。よろしく願います」

「へいへい、私は皆月春子、あんた等の担任よろしく」

色々学校の事について説明して貰った後皆月先生の「んじゃ行くべ」の一声で職員室を後にした。

六話・勇気、欲しいよね（後書き）

作「私にも勇気があれば今頃……」

流「フツ、二次元の方が良いんだろっ？」

作「否定できないっす！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9061v/>

勇者が男だけだと思っていた時期もありました

2011年9月27日22時58分発行